

プログラミング楽しさ理解を

授業支援事業 NPOが説明会 教員や住民ツール体験

【音更】NPO法人教育支援協会北海道(帯広、榎本尚世代表理事)によるプログラミング学習と英語に関する事業説明会が8日、町木野コミュニケーションセンターで開かれた。管内の教育関係者や地域住民ら約40人が参加。2020年度に小学校で始まるプログラミングの授業に向け、同法人が提案する新事業の説明を受けたり、プログラミングの楽しさを学んだりした。

同法人は05年に発足。事業手したことに合わせ、事業説明会などは毎年、十勝マをプログラミングと英語で開催している。今年度から設定した。

らプログラミング授業に関する新事業の立ち上げに着目。小学校でのプログラミング教育は、今春の道徳教科



プログラミング事業などに理解を深めた教育支援協会北海道の事業説明会

化と20年度の英語正式教科化と合わせて計画されている。ただ、学校現場での準備は、道徳や英語に比べて後れがちになっているのが実情だ。

これに対し、同法人は学校への教育支援事業を展開しようとしている。

今後の授業では、米マサチューセッツ大学が開発した教育用プログラミングツール「スクラッチ」を使用。同ツールを使って、子どもに出前授業を行ったり、教員に研修メニューを提供したりする「メンター」(指導者)を地域内に育て、教育現場をサポートする考え。

今後の事業展開を説明した白石友柄専務理事は「プログラミングは物事を細分化し、再構築する思考方法として、いろいろな物事に役立つ。子どもと一緒に失敗しながら学べる人材を育てたい」と話した。

説明会に参加した芽室西小学校の三上智弘教諭(36)は「職場では『全く分からない』という同僚の声も聞く。地域で支援していただけるなら、ぜひ連携したい」と語った。(奥野秀康)